

編集後記

「むなかた電子博物館」紀要編集長
伊津信之介

2012年4月28日、ついに宗像市に博物館として郷土学習交流館「海の道むなかた館」が開館する。展示施設を持たない仮想空間の博物館として異彩を放ってきた「むなかた電子博物館」の今後が注目されるところであり、「むなかた電子博物館」紀要の位置づけも検討が必要であろう。

さて「むなかた電子博物館」紀要は第4号の発行までたどり着いた。原稿を投稿して下さった方々、編集に尽力された方々に心から御礼申し上げる。第4号の編集は、新たに加わった宮川幹平委員によって、WindowsOSでMSワードを使って行なわれた。これは、編集に関わる紀要委員だけでなく、紀要論文を投稿するほとんどの方がWindowsOSのPCを使っているので、フォント（文字種）の一貫性を保った方が効率的に編集ができる点が第一の理由である。また古い文献には旧字体や解読不明な文字が記載され、ルビをふる必要も出て来た。その他の理由も併せてボランティアによる紀要発行はWindowsOSのPCを使って処理するのが望ましいとの結論に達した。これによつて読みやすいレイアウトやフォント、あるいは図表の配置や写真の精彩さなども吟味された。フォントが変わった事によって、表紙や本文の雰囲気も変わった。良く言えばしっかりとした論文誌に近づいたように思える。

「むなかた電子博物館」紀要は、「むなかた電子博物館」における展示の理論的裏付けとなるよう、研究論文、研究ノート、資料を掲載してきた。紀要というと紙に印刷した冊子形式の出版物を連想するが、「むなかた電子博物館」紀要は電子的な出版物を博物館で公開するのが主たる発行方法である。一方電子的な閲覧環境が整備されていない図書館などでの利用の便を図るために冊子も少部数印刷している。

2012年3月に、総務省・経済産業省・文部科学省を軸としたデジタル懇談会等において昨今の電子書籍の急速な普及の中で、電子出版ビジネスの市場拡大をサポートするための公共的なインフラとして株式会社デジタル出版機構が設立され、すべての出版物のデジタル化が急速に進行するものと思われる。

「むなかた電子博物館」紀要も、より読み易く、より利用し易いデジタル出版を目指したいと考えている。